

全日本リコ研だより 第9号

令和5年3月1日発行 JRS編集人 小山内 仁



「何で左手が上じゃなきゃダメ?!」

全日本リコーダー教育研究会
会長 後藤 俊哉

日頃より全日本リコーダー教育研究へのご理解・ご支援を賜りまして心より感謝申し上げます。これまで、本教育研究会の向上発展のために各地区で行ってきました全国リコーダー教育研究大会ですが、北海道北見市で開催予定でしたが、コロナ禍の影響で残念ながら中止となりました。

また、第44回全日本リコーダーコンテストは、令和5年3月26日に、観客有で、生演奏と録音審査という形で開催することとしました。4年ぶりの対面での開催となります。

この4年余りの間、演奏すること、歌うことを制限された中、当たり前に来ていたことへの価値が再認識され、改めて「対面で音楽をするよさ」を実感できました。「人と人をつなぐ」大切なものとして、「豊かな心を育むかけがえのないもの」としてリコーダーの演奏をはじめとする音楽の重要性を深く心に刻むことができました。

先日、ある学校の先生から一つの質問を受けました。「何で左手が上じゃなきゃダメなのですか？」

いろいろ調べたのですが、そのような文献は見つからず、東京リコーダー協会が2020年配信した「リコーダー指導法Web講座」(講師:大阪音楽大学教授・橋本龍雄先生)の動画にて、リコーダーの音孔の位置や数について歴史的な楽器の写真等を交えて分かり易く説明されていました。以下紹介します。

リコーダー素朴な疑問コーナー第3回「何で左手が上じゃなきゃダメ?!」

<https://youtu.be/1P140Lho88o>

(この動画は限定公開としてこのURLより視聴可能です。一定期間を過ぎると視聴出来なくなりますので、ご了承ください。)

○最初は右手、左手どちらが上でもよかった!

14世紀ごろの通称“タルトゥ・リコーダー”は、一番下の孔が真ん中に一つのみでした。16世紀ごろのルネサンス時代のリコーダーは、一番下の孔が2つ空いているけど使うのは片方で、使わない方をロウで埋めていました。つまり右手を上にする場合も、使わない方の孔をふさげばOKだったのです。

17世紀から18世紀ごろのバロック時代のリコーダーは、ほとんど今のリコーダーと変わらないのですが、下の孔は一つだけでした。ですから右手、左手がどちらも上でも可能です。その後、孔は2つとなりましたが、大きさは同じでした。ですから右手、左手がどちらも上でも可能でした。この時期の楽器はリコーダー以外でもバロックオーボエは、一番下の孔のキーがY字型で左右どちらが上でも可能でした。

○教則本に見る構え方の歴史

フィルドウング『ドイツ語の音楽論』(1511年)では、左と右それぞれのイラストが掲載されており、右手、左手がどちらも上でも可能でした。

それから約200年後、オテール『フルート、オーボエ、リコーダーの原理』(1702年)では左手が上のイラストが掲載されていました。

この変化については、リコーダーの支えとフィンガリングをよりスムーズにできると考えたのではないのでしょうか。右利きの人が多く、「左手が上、右手が下」と演奏をしていく上で、高度なテクニックが必要となって今の形になっているのではないのでしょうか。(動画より一部抜粋)

現在のリコーダーの一番下の孔は、違う大きさの孔が2つですので、「左手が上、右手が下」として演奏するのがよいと改めて実感しました。当たり前と思っていたことが、その歴史に触れることで、必然性を感じました。

今後とも本教育研究会へご理解・ご協力をお願い致しますとともに、各都道府県のリコーダー教育研究会のますますのご発展を祈念します。

第43回 全日本リコーダーコンテスト 審査員寸評



第43回コンテスト、 そしてこれから

審査委員長
リコーダー奏者

田中 せい子

近年のコンテストは2年連続でオーディオによる審査となり、いつ従来通りのコンテストに戻るのかと案じておりますが、コロナ禍は意外に長引き収まる目処もつきにくい状況です。本心では少しでも早く皆様の生演奏を聴ければと願うところですが、今回、お送り頂いた音源からでも十分に皆様の費やした時間、努力、情熱を感じ取ることができました。第43回コンテストも大変レベルの高い演奏が多く、皆様がここまで一生懸命リコーダーという楽器を演奏して下さることに大きな感銘を受けました。

今回印象に残ったのはいずれも花村賞を受賞された三重県鈴鹿市立桜島小学校の4重奏(パリジェンヌ)と神奈川県川崎市の川満萌さんの演奏でした。どちらにも共通して素晴らしかったのが音の美しさ、リコーダーという楽器をよく理解したアーティキュレーションです。加えて川満さんの曲にはリコーダーの音を出しながら歌う、という部分があったのですが、リコーダーも歌も音程が見事に決まっていた大変感動しました。(この技は難しく、プロでもなかなかこうは行きません!)演奏される姿を見ずとも、この2組の方達はうまく力の抜けた演奏をされていることがわかります。脱力出来ていないと出てこない、いかにもフラウ

ト・ドルチェ(リコーダのイタリア語、「甘いフルート」という意味)という響きが出ていたと思います。逆に、響きのきつい演奏や弱々しい音からは、音を聴いただけで体が硬くなってしまっている、それも喉が硬いとか、腕が硬いとか、そんなところまですぐにわかってしまいます。リコーダーは他の管楽器よりも奏者の体の状態が直接音の響きとなって現れやすい楽器です。シンプルですぐに音が出るけれど、人の耳を魅了するような響きはなかなか得られない。そんなデリケートな楽器を駆使して素晴らしい演奏をされている皆さんには本当に毎回驚かされます。

数年前より海外からの参加がなくなり、そこにコロナも重なり、以前よりエントリーが少なくなったようですが、これだけ伝統があり、多くのリコーダー奏者、愛好家を輩出してきたこの素晴らしいコンテストにはこれからも末長く続いてほしいと願わずにはいられません。さらには、次の世代の人々にもこの楽器をずっと演奏し続けてもらうために、どうすればより多くの方がリコーダーという楽器に興味を持ってくれるのだろうかを模索するこの頃です。プロ奏者の中にもリコーダー普及のために尽力したいと考えている人は数多くいますので、今後そのような奏者達と全日本リコーダー教育研究会の皆様とがより一層コミュニケーションを密にし、今まで以上にこのコンテストを盛り上げていくことが非常に大切なことであると考えます。私もそのような奏者の一人として皆様のお力になれば幸いです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



全日本リコーダーコンテストに 寄せて

文部科学省教科調査官

志 民 一 成

第43回全日本リコーダーコンテストでは、昨年に引き続き録音を聴いて審査をさせていただきました。聴かせていただいた中には、フレーズ中のエネルギー変化を見事に捉えて表現していたり、音色のバリエーションが多彩だったりした演奏があり、リコーダーの表現力の豊かさに驚きました。新型コロナウイルス感染症の影響が続く中で、様々な工夫をしながら練習の機会をつくり、その成果として素晴らしい演奏をご披露くださった出場者の皆様に、心からお礼申し上げたいと思います。また、このように出場者の皆さんが日頃の研鑽の成果を発表する場を設けてくださいました、全日本リコーダー教育研究会の関係

者の皆様に、深く感謝申し上げます。

今回、コンテストのために録音をする機会があったことで、自分たちの演奏について、いろいろなことに気付いたのではないのでしょうか。演奏しながらではわからなかったことでも、録音して客観的に聴くことで様々なことに気付くきっかけになります。その一番大きなことは、楽器やパートのバランスではないでしょうか。一人のプレーヤーとして演奏しているときには、全体でどのようなサウンドになっているかは分かりにくいものですが、録音することによって確認することができます。また、アーティキュレーションが演奏する場所に適したものになっているかについても、録音によって確認したいポイントだと思います。吹いているときには歯切れよくタンギングできていると思っていても、よく響く残響の長い空間だと、一音一音の句切れが分かりづらくなることも少なくありません。さらには、曲全体の組み立てや、テンポの変化などを確認するときにも、録音を聴くことはたいへん有効です。今は、タブレットなど

の機器で録音したり撮影したりすることが比較的簡単にできます。そういったツールを上手に利用して、自分が審査員になったつもりで、これらのポイントについてチェックし、演奏を磨き上げていけるとよいのではないのでしょうか。



『反復』で音楽は豊かになる！

文部科学省教科調査官

河合 紳和

はじめに、長期化するコロナ禍において、皆さんが厳しい練習環境の中でも、技術と音楽性に磨きをかけ続けてこられたことに心より敬意を表します。

昨年度に引き続き、今年度も本コンテストに関わらせていただき、皆さんの素晴らしい演奏を聴かせていただくことができましたことを大変嬉しく思います。今回は中学生の部の独奏、重奏、合奏、そして高校生の部の独奏、重奏の演奏を聴かせていただきました。どの曲も大変難しい曲ばかりでしたが、皆さんが心から音楽を楽しんでいることが演奏から伝わってきました。また、皆さんの明るく透明感のある素直な音色に、聴いている私の心も洗われるような気がしました。

今回は、皆さんに「音楽における『反復』」について考えていただきたいと思います。音楽には「反復」が多く使われていますよね。「反復」をどのように表現するかを考えたり工夫したりすることは、豊かな音楽表現に欠かせない

最後になりましたが、全日本リコーダー教育研究会をはじめ、関係の皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、本コンテストのますますのご発展をご祈念申し上げます。

課題だと私は考えます。たとえば、同じリズムが連続するような部分では、そのリズムが崩れたり歪んだりしないように演奏することが必要になるでしょう。また、同じ旋律が何度も登場する曲では、音色、強弱、テンポ、あるいはもっと微妙なニュアンスなどを変化させたりすることで音楽をより面白く表現することができるかも知れません。

「反復」には、均一性が要求される場面と多彩さが期待される場面があると思います。前者は演奏に安定感を与え、後者は音楽に流動感をもたらすと言えるでしょう。しかしながら、実際には同じリズムが連続すると緊張感がしだいに緩んでしまいやすいですし、同じ旋律を表情豊かに演奏するには柔軟な表現力が求められます。皆さんには是非、音楽の中で「反復」がどのように使われ、どのような役割を果たしているかを分析し、その効果を最大限に生かすにはどのように演奏したらよいか研究していただき、より面白い、よりカッコいい、よりワクワクするような演奏を目指していただきたいと期待します。

まだまだ困難の多い日々が続くかと思いますが、これからも音楽を、演奏を、そして音楽を通して仲間と交流することを楽しんで、心豊かな充実した日々過ごしてください。次回も皆さんの演奏を楽しみにしています。



互いの演奏を「鑑賞し合う場」を

国立音楽大学教授

津田 正之

第43回全日本リコーダーコンテストでは、小学生の部、大学生の部、一般の部の審査させていただきました。昨年度に引き続き、コロナ禍のため、皆様の素敵な演奏を対面で聴かせていただくことは叶わず、録音での審査となりましたが、どの演奏も聴きごたえのある素晴らしいものでした。参加された皆様の真摯な取組に、心から敬意を表します。

小学生の部では、どの演奏も曲の特徴を捉えて表現を試みる姿勢が感じられました。中でもある演奏では、安定したピッチとアーティキュレーションで、音楽の縦の響きと、旋律の関わりの豊かさが実によく実現されていて心に残りました。また、そのような演奏は、一つ一つフレーズ

の処理もていねいにされていました。

大学の部、一般の部では、選曲と演奏に個人や団体の個性がよく表れていました。独奏では、挑戦的で面白い演奏がみられるとともに、重奏や合奏では、縦の線を揃えつつ、それぞれのパートが豊かに表現された演奏がみられました。特に優れた演奏は、アーティキュレーションを生かした細かな表現が秀逸でした。

録音状態は、昨年度よりも改善されていましたが、演奏をよい形で披露するためには、録音の仕方にさらに注意を払う必要を感じています。先日、リコーダーの専門家の録画・録音の場に同席する機会がありましたが、音響やマイクの位置などに細心の注意を払っていました。

さて、本教育研究会の「リコーダーコンテスト」は、「教育研究会」の名の通り、順位を決めることが最終的な目的ではありません。コンテストまでの主体的・協働的な学びの過程をはじめ、緊張感の伴う場で自分(たち)の音楽を披露すること、互いの演奏を聴いてよさを認め合い、学び合うことがとても重要になります。次年度は、リコーダー

の演奏に向き合ってきた皆様が一同に揃い、互いの演奏に敬意を払いながら鑑賞し合い、素敵な演奏表現を共

有できる場となることを心から願ってやみません。会場で皆様とお会いできることを楽しみにしております。



タイミングの大切さ

横浜国立大学非常勤講師
リコーダー奏者

川 端 り さ

今回は中学生の部、高校生の部の《独奏の部》《重奏の部》を審査させていただきました。北海道・北広島市立大曲中学校の北野暖奈さんによるヴィヴァルディの協奏曲ハ短調第一楽章の演奏が特に印象に残りました。細かい音のダブル・タンギング、運指の滑らかさも素晴らしかったのですが、適所にヴィブラートを使い、またルバートを使ってとても表情豊かに演奏していました。

ルバートはイタリア語で「盗む」という動詞rubareの過去分詞形で、直訳すると「盗まれた」という意味です。時間を盗むのです。例えば1拍の中で4つの16分音符を演奏するとき、1つ目の音に時間を取ったら（盗まれたら）、後の3つは時間が足りなくなるので少し速く演奏する必要があります。音のタイミングをコントロールすることによってそのフレーズの語り方を変えるのです。役者が台本から作者の意図を読み取って演技することや、詩や文章を朗

読することと共通しています。

数年前リコーダー奏者ルーシー・ホルシュさんのインタビュー取材を通訳させていただいた際、心からうなずいた言葉があります。「ヴァルター先生は音楽においてタイミングが重要だと常におっしゃっていました。音楽にアプローチするとき、いつ、どのように、なぜ、何をするか、この4つの質問を私に問いかけ、アプローチの仕方を考えるように教えてくださいました。」（The Recorder、アルソ出版、2021年、p. 12）ご存じのとおりリコーダーは息での強弱表現の幅が他の管楽器と比べると格段に狭い楽器です。強く吹けば音程が上がり、弱く吹けば音程が下がってしまいます。そこで息の強弱のみに頼らない表現法を身につける必要があります。その1つがタイミングなのです。

今回も録音音源の審査でしたが、音源のクオリティが昨年よりも確実に向上したことが聴き取れました。演奏者、先生方の熱意と努力に心から拍手をお送りいたします。録音は演奏者の表情が見えないため音のみでの勝負となります。音のタイミングをコントロールすることで、楽譜という台本をどのように表現するのか常に考えながら、これからも音楽と向き合い続けていただきたいと思います。次回も素晴らしい演奏の数々を期待しています。



コンテストを聴いて思うこと

桐朋学園大学古楽科非常勤講師
リコーダー奏者

古 橋 潤 一

ここ数年続けて審査に携わらせていただいた中で自分が感じたことは、テクニック的な部分は皆さん随分レベルが上がってきたなということでした。

でもテクニックって何のために磨くのでしょうか。自分は、今気に入っている曲、カッコイイと思っている曲を更に良くするために練習を重ねます。つまり、まず理想とする音楽、演奏が先にあるのです。最初からそんな演奏が出来るわけではないので（最終的に出来ない場合）それに近づくためにテクニックを磨きます。

今は昔と違ってネットで検索すれば色々な人の色々な演奏がすぐに聴けます。新しい曲、知らない曲を探したりするにはとても役に立つし、曲の雰囲気や大体のテンポを知るにはとても便利です。でも、その中で気に入った演奏を見つけ、それを真似すること（特に複数の演奏の気に入った部分を継ぎ接ぎしたりすること）に集中しすぎると

本質から逸れていきます。自分もそうですが、演奏者は自分の演奏にオリジナリティーを出そうとする部分があつたに必ずあるものです。作曲者が生きている現代の曲を演奏する場合は直接作者に聞くことができるので、作曲者の意図に忠実な演奏というものの一つの究極の形でしょうが、既に作者がこの世にいない場合は作曲家がどう考えてこの曲を書いたのか想像するしかありません。そして、その想像で出来上がったフレームに自分の感性をどう乗せていくかを設計するわけです。

自分は普段、17世紀頃の古い音楽を主に演奏しています。その頃の音楽は楽譜に書かれている情報が少ないため、想像する作業が多くなりますが、最近自分がまずすることは、細かく書かれている音楽をできるだけ削ぎ落として、まずシンプルな歌を見つけることです。例えばそこに書かれている16分音符が全て装飾だと仮定したら、元になるメロディーはどういうメロディーなのか？と。16分音符に次は8分音符を削ぎ落とし、次は4分音符を…とやっていくと、そこにあるコードの中のどこかの音が残ります。それに今度は剥ぎ取ったパーツを肉付けしていきます。そういった作業を頭の中でするのですが、それをしていると元のメロディーにどういった感じに装飾が施されていった

かを想像することができてきます。それができるようになると、今度はシンプルな曲や、音数の少ない部分に、どのような装飾をつけてあげると格好良くなるかがわかってきます。

例えばそのように楽曲を分析していくと、人真似ではない、自分なりの演奏に近づいていくように思うのです。また、今度は出来上がった理想の音楽を、理想的な形に演奏するために必要なテクニックを考えるようになります。身についたテクニックを、そういう方向からのアプローチで曲に活

かせるのが本当は必要なことのように思っています。

自分は、出来ることなら最初から「こんな曲を選ぶと良い点がもらいやすい」とか、「なるべく人の知らない奇抜な曲を!」とか、そういう考えでアプローチせず、「この音楽、素敵だな」とか、「この曲をカッコよく演奏するにはどうすると良いだろう…」とかいう方向から始めて、練って突き詰めたものが舞台に乗って欲しいなと思っています。



《第43回全日本リコーダー コンテスト審査を終えて》

上野学園大学講師
リコーダー奏者

太田 光子

今回は小学生の部、大学生の部、一般の部の審査を担当いたしました。新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年に引き続き全て録音審査となりましたが、全国から集まってきた皆さまのリコーダーの音を今年も聴くことができ、心から嬉しく思いました。その中から特に印象深かった団体を感想とともに挙げてまいります。

まずは、小学校の部《独奏の部》、「ソナチネ」を演奏した、三重県・鈴鹿市立桜島小学校。テナーリコーダーの音色が下から上までどの音域も美しく鳴っていて、細部の表現も大変魅力的でした。《重奏の部》での同小学校「3つのインターリュード」他を演奏した4重奏も各パートの音が大変安定しており、内声のしっかりした厚みのある美しいハーモニーでたっぷり歌っていました。「飛鳥の里へ」を演奏した新潟県・十日町市立馬場小学校は、曲の変化に合わせ大変表情豊かに演奏していました。特に冒頭部分や曲の最後の部分の躍動感や、全員でフレーズの方向性

をつくり上げ音楽を進めていく様子にワクワクさせられました。

一般の部《重奏の部》では、テレマンのデュエット第4番を演奏した北海道・リャンサクレさん。生き生きとした第1楽章アレグロでは、アーティキュレーションを工夫し、テーマに変化をつけさせていたのも効果的でした。テクニク的にも音楽的にも全体を通していいで、それでいて生き生きとした演奏に仕上がっていて、とても良かったです。

東京都・ぶらむリコーダーアンサンブルさん、音楽的な意図が明瞭で、キレのあるリズムセクションとゆったりした箇所とのコントラストが見事でした。この場には書ききれませんが、他にもすばらしい演奏に多く出会えたことを、申し添えておきます。

参加者の皆さま、ご出場おめでとうございます!これからもこの調子で、ステキな演奏を続けていってくださいね。コロナ渦でリコーダーの演奏ができない学校も多い中、指導されている先生方の熱意に、感服しております。子供たちも愛好家の大人の方々も、このような貴重な経験をもとに、「これからもリコーダーを吹き続けてほしい」と心から思います。

さて、また来年はどんなすばらしい演奏に出会えるでしょうか? 今からとても楽しみにしております。



「音色の追求」

上野学園大学講師
リコーダー奏者

浅井 愛

今回私は、小学生、大学生、一般の部を担当しました。その中で特に印象に残ったのが、小学生独奏の部より、北海道・北広島エアリードット、北野寧菜さん、M. ブラヴェ作曲『メヌエット』です。ソプラノの音色が美しく、安定した息でフレーズをコントロールしており、変奏終盤の速いパッセージのテクニックには圧倒されました。また、小学生重奏の部から、三重県・鈴鹿市立桜島小学校、J. オフエンバック作曲『バリジェンヌ』は、冒頭の響きの美しさに心を奪われました。バス

リコーダーの低音域がよく響いており、そこに他声部が寄り添い、美しいハーモニーを作り出しています。音程の取り方やテクニックなど多彩な表現力が印象に残りました。大学生独奏の部から、神奈川県・川満萌さん、P. ローズ作曲『I'd Rather Be In Philadelphiaより』の演奏です。難しいリズムを良くつかみ音楽にのって演奏しており、楽章それぞれの性格を理解し、現代奏法も難なく演奏されていました。そして最後に、一般の部から北海道・リャンサクレ、G. Ph. テレマン作曲『デュエットより』のお二人です。これぞリコーダー作品! テレマンの名曲にチャレンジしました。2声のハーモニーの美しさに感動! 多彩なアーティキュレーションに驚きました。

第43回リコーダー教育研究会全国大会は前回と同様に録音審査という形となりましたが、情熱ある演奏、丁寧な音楽づくりなど、私たち審査員にダイレクトに伝わってきまし

た。ご参加くださった団体一つ一つに賛辞を送ります。

最後にリコーダーテクニックについて少しお話しします。皆さんは高音を出す際に気をつけていることはありますか。高音は、存在感のある音になりがちです。以下の3つに気を配ってみましょう。①サミングの開け方②タンギングのタイミング③息のスピード感です。また、練習方法として、ソプラノリコーダーのラの運指で①タンギングなしで音を出す(音が出る、出ない瞬間の境目を探します)②低いラと高いラをレガー

トで演奏する(サミングの状態を考えながら、高音へ移動する時に息のスピードを考える。高音の息のスピードは低音を吹く時とさほど差が無く、息を支える程度です。)③最後にタンギングをつけて発音をする。などの練習を取り入れましょう。息のスピード感に慣れることで、やわらかく響きのある高音が出せるようになります。テクニックを丁寧に習得することで音楽的表現がより豊かになります。簡単なことではありませんが、是非、挑戦してみてください。



全3回の録音審査に思うこと

リコーダー奏者

森 吉 京 子

コロナ禍での録音審査は2021年に続き2回目になりました。録音音源への講評(審査無し)や録音審査も合わせると3回目になります。金・銀・銅の賞が各グループに贈られることになった前回の録音審査では、先生方のご指導がどのようなものであったか、演奏する児童・生徒たちがどのように音楽に向き合っているか、技術的にはどうか、問題なくその演奏から聴き取ることが出来たことに驚きました。当然ながら、録音条件の違いは音質や音量バランスに影響を与えているものの、もっと奥から「音楽」は明瞭に聞こえてくることに感動したものでした。そんな前回の経験を経て、今回はもっと踏み込んだ聴き方をしてみたいと思っていました。

最少人数で楽しめるアンサンブルとして、二重奏を演奏する3組が出場しました。いずれのデュエットもお互いの音をよく聞き合っていたと思いますが、相手の音を聞いているだけでは美しいハーモニーにはなりません。リコーダーは、息を強くすれば音程は上がり、息が弱すぎれば音程は下がります。二人の音の「音程合わせ」は音楽を奏でる第一歩になりますから、楽器の特質を良く理解しながら音程を合わせて美しいハーモニーを目標にしてください。二

重奏では、和音を構成する3つの音が一音欠けて二音になるために、和音の捉えづらさを感じることがあります。正しい音程が曖昧なまま進んでしまっても、何となく満足してしまうこともあります。フレーズの終わりの音など、大事なタイミングの音程に気を付けることから始めると良いと思います。先生方のご指導が重要になります。

また、ルネサンスやバロック時代の二重奏では「テーマの模倣」が常ですから、まずテーマがどこから始まってどこで終わるかを見極め、その後にテーマを「どのように吹くか」を考えることが、二人の息づかいやタンギングを合わせることになります。音程、息づかい、タンギングが合うようによく聴き合ってください。グループの練習メニューの中で、デュエットを組んで二重奏の練習をぜひ入れてみると良いと思います。大人数のアンサンブル練習に制限がある日常で、上質なデュエット演奏を取り入れれば、その効果は大編成のアンサンブルの重要な基礎になるに違いありません。譜読みの練習に、あるいは大勢で集まれないから仕方なく二重奏…の位置付けになりがちな「デュエット演奏」をもっと有効に活用してみてください。

どんな環境でもリコーダー演奏への情熱を持ち続けてくれる児童、生徒の皆さま、それを支えて下さる先生方の日々のご努力に感謝申し上げます。コロナ禍での全日本リコーダーコンテスト「録音審査」は、演奏する皆さんお一人お一人にとって、自分たちの演奏を様々な面から客観的に深く考える良い機会だったと思います。



反比例の発想

リコーダー奏者

吉 澤 徹

毎年、年越しの時期に皆さんの素敵な演奏を録音で改めて聴き、当日会場で書いた講評を見返ししながら、感じた点を表題に込めてお伝えしたいと思います。

私たちのリコーダーは西洋由来の管楽器ですね。

皆さんの演奏は、

西洋の言葉を使って生きてきた作曲家によって作られたメロディーを、「日本語を使って生きてきた私たちが、自らの心を聴衆に向かって表現をする。」という行為です。

自分自身の演奏や、レッスンでも長年思っていることですが、私達が使う日本語のイントネーションが、楽器演奏に大きく反映しているのです。西洋音楽の演奏には、西洋言語的な、逆の(反比例の)発想を持つべきではないかと思うのです。

以下のポイントです。

	常態	反比例
リラックスしてプレスする	緩いプレスを何となく	横隔膜を使いマックスに
フォルテで吹く	高い息圧+強いタンギング	高い息圧+緩いタンギング 軽い息圧+強いタンギング
ピアノで吹く	低い息圧+緩いタンギング(下がる音程)	速い息速度+鋭いタンギング
2音(2個目が高い)	クレッシェンドする/2個目が長い	2個目を、ディグレッシェンド+やや短めに
ロングトーン	後ろに行くにつれてクレッシェンド傾向	ディミニュエンド 何処の箇所にも気を込めるかを決めて吹く
同音反復	後ろの音の方がフォルテ気味+テヌート気味	後ろの音が軽め+短め

等、自分の演奏傾向が上記の〈常態〉に偏る点を、実験的に〈反比例〉の吹き方に替えてみて、演奏表現に新しい発見発想が有れば、積極的にそれを使うように心がけてください。

その為に、良い姿勢でリラックスして豊かに息を取る事は最低限の前提となりますが、リラックスすると何故か緩いテンションで少量程度のプレスになる、と云う状況が生じます。沢山息量をテイクすると、何故か気負って体に

力が入るものです。

まず体を緩めても横隔膜を使い、マックスの息が取れる様な意識を持ち、その上で口腔内の容積を広く、舌先が口中で1番前方で動くポジションにセットしましょう。

このような実験的練習で、音色に様々な色彩感が出て、演奏演出に可能性が広がります。

皆さんのこれからの演奏をまた楽しみにしています！

「全日本リコーダー教育研究会50年前の邂逅とそれから」

リコーダー奏者、元横浜国立大学、東京藝術大学講師 吉澤 実



武蔵野音楽大学3年の時、フランス・ブリュッヘンの演奏に感動し、リコーダー同好会を立ち上げた。募集したところ6人の新入生が入会した。夏休みに菅平で合宿をし、高原の緑と抜けるような青空のダボス・グレンデでアンサンブルを楽しんでいたところ、週刊『サンデー毎日』の記事に取材され清々しい夏休みの学生生活が紙面に載った。偶然のことであったが、楽しい思い出として残っている。

この同好会の顧問になっていただいた成田欽家先生の勧めで、豊島区立千川中学校において「武蔵野音楽大学リコーダー同好会」として演奏をした。その時が全日本リコーダー教育研究会の発会の催しだったと記憶している。

中心となっていたのは千川中学校の音楽教師である徳山博良先生(全日本リコーダー教育研究会第二代会長)だった。濁声だが説得力のある言葉の響きは今でも鮮明に覚えている。記憶にあるのは花村大先生(全日本初代会長)、本山定男先生の来席、そして、上杉紅童先生の演奏である。おぼろげだが、岐阜県の田中吉徳先生、鳥取県の実田彰先生、山本喜三先生、新潟県の小原惇先生、文筆家でリコーダー愛好家の串田孫一さんも来席していたかもしれない。

50年前に学生の私が参加したのは偶然の出来事であった。留学から帰国し、この全日本リコーダー研究会主催のリコーダーコンテスト審査委員長を長きにわたって務めたことは、この時の縁なのであろう。

大学卒業と同時に、私はザルツブルクにあるモーツァルテウム大学・オルフ研究所に音楽教育研究のため留学した。カール・オルフの音楽教育理念を学び、日本の音楽を取り入れて未来に繋げられる音楽教育を研究したのは、日本の音楽教育に寄与していくためだ。ちょうどオルフの80歳の記念式典のためコンテンポラリーダンスやオルフの作品をオルフから直接指導を受けてザルツブルク、ミュンヘン、ベルリンで舞台に立った。翌年、オルフ研究所のリコーダー教授であるフェリチタス・ケールドルファが、新設されたモーツァルテウム大学リコーダー科教授に就任したため、私もリコーダー科第1期生として入学した。そして、ニコラウス・アルノングールの元で3年間学び歴史あるモーツァルテウム大学の最初のリコーダー・ソリスト・ディプロマ取得生として卒業した。その後、モーツァルテウム管弦楽団やオーストリア現代音楽アンサンブルのフルート奏者として活動し、フルートやリコーダーの現代曲の初演を、クラウス・アーガー率いるオーストリア現代音楽アンサンブルで数多く行った。

帰国後、東京カテドラル聖マリア大聖堂でリサイタルを行い、廣瀬量平氏に委嘱した「Ode Ⅰ」を初演した。意気揚々と、さあこれから日本で頑張ろうという時、ある大学から集中講義の講師を依頼された。講義名は「簡易楽器演習」とあった。日本の音楽教育界ではリコーダーが「簡易楽器」として扱われていることに非常に驚き、屈辱と怒りと悲しみを覚えた。この時、日本の音楽教育に一石を投じるリコーダーの伝道師になろうと心に決めた。「悲しみは力に、怒りは智慧に導かれるべし」と宮澤賢治の心情を胸に、リコーダーとはどのような楽器であるかを多くの人に伝えるための私なりの戦いが始まった。幸いにも他の大学では「教材研究」という講義タイトルであった。この大学で講義を受けた学生が現在の全日本リコーダー教育研究会会長の後藤俊哉校長である。とても嬉しく思う。

1980年にオランダのリコーダー奏者ワルター・ファン・ハウヴェとともに夏期講習を行い、沖縄県リコーダー教育研究会の

立ち上げにも関わった。その後、崎山用豊会長のもと、仲本朝昭先生、小波津繁雄先生、砂川徹夫先生、石垣陽一郎先生、親泊明美先生(前全日本会長)のリコーダー教育への貢献は素晴らしいものであった。同じ意志を持った同志に思えた。また、新潟県佐渡市では渡部加代子先生、金子美智子先生、三重県桑名市では日置美知代先生など徐々に同志が増えていった。

そのような中、文部省(現文科省)の教科調査官及び視学官であった小原光一先生に依頼され、全都道府県の指導主事のための「実技指導講座」を1984~87年、金本正武教科調査官の依頼で1992~1993年と延べ12回に渡り行う機会に恵まれた。

ここでは実技指導と同時に、リコーダーの歴史とリコーダーの持つ教育的な力を共に考え、教育現場で実践できることに重きを置いた。指導主事はこの講座で学んだことを各都道府県に持ち帰り伝達講習を行った。その後、全日音研や各県の教育センターで講演を行った。この時、まさに私はリコーダーの伝道師となったと思う。

1986年、NHK教育テレビ(現Eテレ)学校放送第3学年「ふえはうたう」の番組講師を依頼され、水を得た魚の如く、リコーダーのもつ教育的な力を考えながら放送台本やテキストを書いた。この年から番組では「たて笛」ではなく「リコーダー」という名称で台本とテキストに明記した。歌と一緒にリコーダーを学ぶことでいろいろなニュアンスを表現できるよう、新曲を毎回委嘱した。「またあそび」はシとラの音で唱えうたや遊びうたのうたい方の模倣により自然にアーティキュレーションの練習するために作曲していただいた。低いドの練習のためには、低いドから高いレの音を使った「赤いやねの家」を作曲していただいた。「赤いやねの家」は曲ができた後に歌詞が付けられた。この年は全て上柴はじめさんに作曲を、織田ゆり子さんに作詞をお願いした。

「あ」というセリフが悲しみ、喜び、驚き・・・と表現できるように、一つの音符も多様な表現ができることや即興の面白さやも放送内容に取り入れた。弥生の土笛づくりを通して歴史や音の生まれる仕組みやいろいろなことに興味関心を育めるよう総合的な音楽番組にした。

リコーダー教育研究会で知り合った北海道の小山内仁先生(現全日本副会長)からは日本の最北東端の小学校・知円別小学校の児童が雪洞の前でリコーダーを演奏している写真と演奏テープが届いた。沖縄県の仲本朋子先生からは普天間基地の戦闘機が見える金網の前で普天間第二小学校の児童がリコーダーを吹いている写真と演奏テープが届いた。児童のメッセージとともに全て番組で紹介した。その後、日本各地の小学校からいろいろな土笛も届きその多さと種類に喜んだ。

昭和22年度、昭和26年度(1951年)の学習指導要領音楽編(試案)では諸井三郎先生、花村大先生らが「笛」としてとりあげ、その後「たて笛」と「よこ笛」など分類していたことなどを説明し、いろいろ働きかけた結果、平成4年度(1992年)に学習指導要領の「たて笛」表記が「リコーダー」と改称された。NHK「ふえはうたう」でリコーダーの名称を言い始めてから6年経っていた。

NHK「ふえはうたう」の教育理念をもとに、リコーダーのもつ教育的な力をリコーダー教本『いい音見つけた』(教育芸術社1988年)と『NHK新訂ふえはうたう』(音楽之友社1988年)の指導書に次のようにまとめた。

「リコーダーのもつ教育的な特性」

- ①発音が簡単のため、早期のうちに喜びのある音楽体験ができる。
- ②管楽器奏法の基礎である楽器の支え方、呼吸法、タンギング奏法、運指法の基本が短期間に学べる。
- ③「息」で生まれる音は「自分」の「心」の音として伝わるため、歌唱法と共通性があり、音楽表現法を習得しやすい。
- ④音をつくる楽器のため聴音能力や創造力が芽生えやすい。
- ⑤ソプラノとアルトリコーダーを学ぶことで、調和を必要とするアンサンブルに展開しやすい。
- ⑥中世、ルネサンス、バロック、現代曲と幅広く豊富なレパートリーがあり、文学、絵画、踊りとも関連があるため、あらゆる年代の人々の知的好奇心や美的要求に応ずることができる。
- ⑦古楽、現代音楽、教育のための楽器(生涯学習楽器)の要素をもつ。

この教本を出版した1988年から現在まで横浜市教育委員会夏期講習を毎年行なっている。今年で連続35年目を迎える。受講した先生は延べ3000人を超えるであろう。横浜国立大学で1993年から22年間、東京藝術大学では2008年から9年間、多くの学生たちにリコーダーの演奏法と指導法、そしてリコーダーの持つ教育的な力を伝えてきた。学生たちが教育現場に立った時に私の講義内容が役立つことを祈っている。

生涯学習としてはNHK「趣味悠々」で2001年に「アンサンブルで楽しむリコーダー」、2009年に「リコーダーで奏でる懐かしのオールディーズ」の講師を依頼され、テキストを書いた。シェイクスピアの「ハムレット」の第3幕2場に“嘘のように簡単に音が出るが、オルガンのように素晴らしい音楽が奏でられる”とリコーダーが登場する。フェルメールやファン・フリートがヴァニタス画に描いたほど広くヨーロッパで親しまれていた楽器である。G.Fr.ヘンデルやG.Ph.テレマンは多くのリコーダーソナタや組曲、協奏曲を、J.S.バッハは21曲のカンタータや3曲の協奏曲を、A.ヴィヴァルディは超絶技巧の協奏曲を数多く作曲した。音楽は単に音を楽しむのではなく生きることに必要なものであり、学校で習ったあのリコーダーがこんなに長い歴史を持ち、多くのレパートリーがある芸術的な楽器なのだとか多くの人たちが感じたに違いない。この番組をきっかけに、日本の各地に合唱団のように多くのリコーダーサークルが生まれていくこととなった。

ルネサンス、バロック時代のリコーダー作品の素晴らしさは計り知れない。これらの作品は全てオールドフィンガリング(現在のバロック式運指に類似)のリコーダーのために作曲されている。ジャーマン式運指のリコーダーは1926年頃、ナチ党の青少年音楽教育運動で考案され戦意高揚の道具として考案された笛だ。ベルリンオリンピックで合奏されたナチスのジャーマン式リコーダーが、今日の平和な日本で広く使われている。日本の学校教育でのジャーマン式の多用は、大学の教職課程でリコーダーを指導できる大学教員がほとんどいないことが主な原因であろう。現在、ドイツはもちろん欧米ではジャーマン式は使用していない。ジャーマン式ソプラノリコーダーはト長調の曲がすでに演奏困難となり、アルトリコーダーではハ長調の曲の演奏でさえ難しくなるからだ。

横浜市では既に30年以上前から小学校5・6年生でアルトリコーダーの導入をおこなっている。それが可能なのはアルトリコーダーと運指が応用できるバロック式ソプラノリコーダーを使用しているためである。

タンギングについても私が執筆前の教員養成課程用「音楽教育法」には「リコーダーのタンギングは舌を吹き口に触れて行う」と書いてあった。このひどい間違いにも驚いた。教員免許更新講習を10年間行ったが、タンギングを吹き口に触れて演奏し、指導している現役教師がいることにその弊害を感じた。1535年にS.ガナッシがヴェネチアで出版したリコーダー教本「フォンテガラ」には58種類のタンギング・シラブルが書かれている。その他の歴史的教本もタンギングは舌を吹き口に触れて行う解説は無い。昨今、日本音楽教育学会でもジャーマン式のもつ可能性を唱えたり推奨したり、移調楽器としてアルトリコーダー用移調楽譜を扱うことを試みようとする浅はかな考えも聞かれるようになった。どれもかつてドイツで行われて失敗した事例だ。パヴロフの著した「茶色の朝」のような暗澹たる気持ちになる。また、J.S. バッハ以前の時代から現在もアルトリコーダーは実音記譜で書かれているが、現在、日本の小中学校音楽教科書はアルトリコーダーの音符表記がオクターヴ低く記されている。実音記譜にすべきだと長い間働きかけているのだが、教科書での変更はなかなか難しいようだ。

私が長年編集執筆に関わっている教育芸術社の教科書はソプラノとアルトの譜面のト音記号の上に[8]を加え、実際に響く音はオクターヴ上と表記している。

指導者育成と子どもの自立支援のため、インドネシア、インド、タイ、ラオス、ミャンマー、台湾、韓国などいろいろな国にJICA、NPOの音符、YAMAHA財団の事業で何度も渡った。2002年からインドネシアの音楽教育プロジェクトに参加し3年かけて指導者講習を行った。子どものためのリコーダー教本『Aku suka Recorder』(2004年)と教師と学生のためのリコーダー教本『Buku pelajaran Recorder untuk guru dan pelajar』(2004年)、台湾では台北市、台中市、台南市、高雄市の教育委員会主催で3年連続の指導者講習を行い、リコーダーアンサンブル教本『直笛入門教本』(2005年)を出版した。2016~17年は国際交流基金の事業で「栗コーダーカルテット」と共に演奏し、ワークショップでリコーダーの持つ教育的な力をいろいろな国で唱えてきた。現在はエジプト、ブラジル、ヴェトナムなど世界7カ国、5,150校、127万人の子どもたちのためのYAMAHAスクールプロジェクトを津田正之教授(前文科省教科調査官)のもとで収録している。私と娘と孫の親子3代が加わったアンサンブルの収録と、私が教師で孫が生徒役のリコーダー演奏の基礎の収録である。なんと幸せなことであろう。

今までいろいろな邂逅があった。そのつと驚き、落胆し、怒り、喜び、悲しみ、祈り、そして、感謝してきた。何故なら、音楽教育は、子どもの内にある未知なるものを見つけ、引出し、教師と互いに育み合うことだから。一緒に歩く私にも未知なるものが潜んでいることを子どもが教えてくれるから。子どもと共に実際に聞こえる音を通して実際には聞こえ無い音を聴くことができるから。音を発することは生命行為そのものだから。

徳山博良先生の「祈りは実る、吉澤実!ワハハ～」という大きな濁声が、50年経った今でも私の心に響いている。心からありがたく思う。

全日本リコーダー教育研究会役員名簿

役職名	氏 名	担 当	所属先(令和5年2月現在)	役職名	氏 名	所属先(令和5年2月現在)		
会 長	後 藤 俊 哉		横浜市立桜岡小学校	名 誉 会 長	初 代 花 村 大 良 二 代 徳 山 博 正 三 代 中 澤 正 人 四 代 親 泊 明 美	故人 故人 板橋区文化・国際交流財団 沖縄県リコーダー教育研究会		
副 会 長	小山内 仁 根 津 江美子 富 山 和 幸 上江洲 研 究	財 務 統 括 広 報 統 括 事業・研究統括	北海道教育庁宗谷教育局 十日町市立上野小学校 川越市立霞ヶ関小学校 糸満市立糸満南小学校		顧 問	三 木 貞 夫 影 山 建 樹 橋 本 動 也 越 智 健 一朗 皆 川 昌 雄 森 嘉 雄 日 置 美知代	元大阪市公立中学校 元静岡県公立中学校 元高知県公立小学校 元東京都公立小学校 元新潟県公立小学校 元新潟県公立小学校 元三重県公立小学校	
本 部 役 員	井 戸 正 利 大 吉 幸 子 長谷川 紘 子 漆 畑 友 美 嶋 見 靖 之 金 秀 賢	事 務 局 長 兼 任 東京担当役員兼任 事務局次長兼任 新潟担当役員兼任 大阪担当役員兼任	東京リコーダー教育研究会 石狩市立厚田学園(前期課程) 立川市立第四小学校 川崎市立三田小学校 佐渡市立両津中学校 大阪リコーダー教育研究会			原 田 彰 仲 本 朝 昭 小 池 純 夫 小 原 淳 惇	元鳥取県公立中学校(故人) 元沖縄県公立中学校(故人) 元新潟県公立小学校(故人) 元新潟県公立中学校(故人)	
地区担当役員	三 嶋 裕 也 嶋 見 靖 之 菅 圭 一 小 形 隆 次 長谷川 紘 子 宮 川 史 枝 鈴 木 光 光 山下 照 乃 長 岡 む つ み 金 秀 賢 松 本 聖 子 宮 永 智 洋 高江洲 博 子	北 海 道 担 当 新 潟 担 当 栃 木 担 当 茨 城 担 当 東 京 担 当 長 野 担 当 静岡(静岡地区)担当 静岡(浜松地区)担当 三 重 担 当 大 阪 ・ 韓 国 担 当 宮 崎 担 当 鹿 児 島 担 当 沖 縄 担 当	北海道教育庁渡島教育局 佐渡市立両津中学校 元栃木県公立小学校 古河市立古河第一小学校 立川市立第四小学校 長野市立清野小学校 静岡リコーダー教育研究会 静岡リコーダー教育研究会 鈴鹿市立桜島小学校 大阪リコーダー教育研究会 宮崎市立穂中学校 さつま町立宮之城中学校 沖縄県リコーダー教育研究会			名 誉 会 員	玉 利 敬 三郎 門 野 フ ミ 太 田 正 明 花 岡 澄 夫 砂 川 徹 夫 八 幡 健 一 橋 本 研 二 近 藤 誠 二 中 島 聰 南 雲 照 諸 岡 忠 榊 正 中 村 毅	(東 京) (鹿 児 島) (長 野) (長 野) (沖 縄) (鳥 取) (東 京) (北 海 道) (故 人) (故 人) (故 人) (故 人) (故 人)
事 務 局 長	井 戸 正 利		東京リコーダー教育研究会	相 談 役			吉 澤 実 本 村 睦 大 金 子 吉 澤 尚 北 村 健 北 山 俊 上 杉 紅 童	実 幸 之 治 徹 彦 隆 (故 人)
事 務 局 次 長	牛 田 恵 美 漆 畑 友 美	庶務・コンテスト事務局担当 財 務 ・ 会 計 担 当	東京リコーダー教育研究会 川崎市立三田小学校					
監 事	馬 場 喜久雄 山 田 明 彦 高 麗 秀 純	ホームページ管理担当	竹早学園竹早教員保育士養成所 一般企業 一般企業					

(令和2年10月1日~令和5年9月30日)

全日本リコーダー教育研究会 創立50周年記念表彰のお知らせ

この度創立50周年を記念して功労者表彰を決定しました。

尚、表彰式は令和5年3月26日開催予定の第44回全日本リコーダーコンテストの閉会式前に開催します。

①「リコーダー教育勲功表彰」・・・

会長職にあった者で名誉会長に推挙された者
四代名誉会長 親 泊 明 美 様

②「リコーダー教育功績表彰」・・・

リコーダー教育の確立及び発展のために貢献し、
顕著な功績があると認められた者
吉 澤 実 様

③「審査員功労表彰」・・・

この10年間コンテスト審査員として向上に尽力した者
田 中 せい子 様
吉 澤 徹 様
古 橋 潤 一 様
太 田 光 子 様
浅 井 愛 様
川 端 り さ 様
津 田 正 之 様
森 吉 京 子 様

④「感謝表彰」・・・この10年間で協力いただいた企業等 江戸川区総合文化センター 様

編 集 後 記

ここにリコ研だより第9号を発行する。今回も第43回コンテスト審査員より御寄稿いただいたことを心から感謝申し上げます。

また、今号は創立50周年記念特別寄稿として、相談役である吉澤実先生から「全日本リコーダー教育研究会50年前の邂逅とそれから」と題した玉稿をいただいた。編集を担当する者として有難いことである。厚く御礼申し上げます。吉澤実先生には、様々なご助言、ご指導をいただき、リコーダー教育のあるべき姿をご示唆していただいた。これからの相変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りたく、お願い申し上げます。次第である。

改めて50年間の知の蓄積を統合して社会に還元し、我が国のリコーダー教育の再生に貢献する覚悟を持たなければならない。Mohandas Gandhiの言葉、“An ounce of practice is worth a pound of preaching”（1オンスの実践が1ポンドの説教（伝導）ほどの価値がある⇒解釈：ものごとを教え諭すために何度も何度も説教するよりも、一度実践して見せる方がはるかに効き目があるという意味）を合言葉にし、「リコーダーのもつ教育的な特性」をもって危機的日本の音楽教育の再生に貢献するとともに、JRSの新たな10年の歴史を築くことを決意する。伝道師の熱い思いを胸に刻み、我々自身の手によって切り拓くほかに道はない。

入会のお知らせ

本会への入会手続きは随時受け付けております。一緒にリコーダーの花を咲かせましょう！

共に学び、共に成長するリコーダー愛好家の皆さんの入会を心よりお待ちしております。

本会の会員は次のとおりとする。

- (1)正 会 員 リコーダーを愛好する個人で別に定める会費を納める者
- (2)研究会会員 各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会で別に定める会費を納める団体
- (3)維持会員 本研究会の目的に賛同し、別に定める会費を納める者及び団体
本会に対し特に功労のあった者のうちから、総会の議決をもって推薦された者。
- (4)名 誉 会 員
(名誉会長、顧問、参与、名誉会員及び相談役の名称で名簿に記載する。)

会費は、年会費として徴収する。

(1)正会員一人＝ 3,000円

(ただし研究会会員で登録した者は免除)

(2)研究会会員一研究会＝10,000円

※研究会会員とは、各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し、本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会を指す。

※研究会会員に所属し、会員名簿に掲載されている者は正会員と同様の扱いとする。

(3)会費の納入は、毎年2月末日までに納入すること。
(納入方法は別途定める。)

申し込み先 _____
〒350-1175 埼玉県川越市笠幡177
川越市立霞ヶ関小学校内
全日本リコーダー教育研究会 副会長 富山 和幸
FAX:049-239-1089 (できるだけメールにてお問い合わせください)
Mail:zen.rikoken@gmail.com HP:http://www.zenrikoken.com/